

週刊朝日

対談「14才の母」の父と母

「初めて
娘の妊娠を
知ったとき…」

中村獅童の女癖と
竹内結子の男遍歴

移植は患者のため？
万波医師の光と影

新潟監禁犯・佐藤宣行
獄中からの手紙

大反響！元東京特派員が書いた
「プリンセス・マサコ」の衝撃

国民に明か
されていない
雅子さま
本当の
ご病状

集中連載
がん医療の嘘
「さまよう
がん患者たち」

11|24
2006
320円



元東京特派員が書いた『プリンセス・マサコ』の衝撃



皇太子妃雅子さまの一日も早いご快癒のために、我々は何ができるのか。〈雅子さまの周囲の人たち〉が、何カ月、いや何年もの間、彼女が深刻な状態であることから目を背け、対策をとらなかつたことは不思議ではない(略)。先週号に続いて、ベン・ヒルズ氏のインタビューを伝える。

先週号に掲載したあなたの著書に関する記事が、大きな反響を呼んでいる。

「私の著書に関する記事が読者をひきつけたと聞き、とても驚いています。皇室の話題があまりにタブー視されていて、あれほど率直なことを書いた日本のメディアが今までなかったためでしょう。日本のメディアは(家が放火された)加藤紘一氏と同様の目に遭うこ

1993年1月、お二人でのぞんだ婚約会見で、「お二人は誰か、お二人は誰か」と聞かれ、こうユーモアたっぷりに答えられた雅子さまに、「新しい時代の息吹」を感じた人も少なくなかっただろう。その雅子さまから、関連なお言葉や笑顔が消えていったのは、いつ頃だったのか。〈雅子さまが公に出なくなった頃〉の「ご病状」を、ヒルズ氏はこう伝えて

2005年頃の話として、こんな記述もある。『浮き沈みの激しさが雅子さまの生活で目立つようになってきた。それは誰といふかにもよる。ある日には昔の同級生たちと午後のティータイムを陽気に楽しんでいたらかと思うと、翌日は愛子さまが遊んでいるのを見守りながら、目を閉じて壁に寄りかかり、ひとりでは立ってられない様子だった』

「あなたは誰から、これらの情報を得ているのか。皇太子さまの友人や、皇太子夫妻に近い日本人ジャーナリスト、そして、ここでは詳しくは明かせない情報源もあります。東宮職員の間関係者も当然、含まれています」

ベン・ヒルズ=1992年から95年の3年間、オーストラリアの有力紙シドニー・モーニング・ヘラルドなどで東京特派員を務めた。オーストラリアのピューリッツァー賞と称されるウォークリー賞を受賞。戦後日本政治や人々に関する著書『日本一戦列の人々』がある

雅子さま



国民に明かされていけない

本当の病状



証言も紹介されている。

「退屈と言うべきではないだろうが、孤独、ひどく孤独な様子だった。外出も買い物も、展覧会に出かけることも、地下鉄に乗ることもできない(略)」

さらに、ヒルズ氏はこうリポートしている。〈雅子さまはお付きの女官たちにも音をあげていた。女官は雅子さまを起すことから、服を選び、お風呂に入れることまで、日常の

一から十までを取り仕切っていた。5、6人いるこれらの係の人たちは(略)昔から公家の家が何代にもわたって引き継いできた仕事だ。大抵の人が何十年も御所にお勤めしていて、雅子さまの便宜を図るところが、何をすることも頑固に独特のやりかたを押し通した。雅子さまは彼女たちのおせっかいに我慢がならないようだった」

ただし、結婚を決めたのは雅子さまご自身である、とも指摘している。

お二人が初めて会ったのは結婚の7年前の86年のこと。皇太子さまが、雅子さま以外の妃候補に関心を示されなかったという話はよ

く知られているが、一方の雅子さまは、こんな決意を秘めていたという。

「雅子さまは、「究極の外交官になろうと思う」と漏らしていた」

それに関連して、天皇陛下の学習院時代のご学友で

元共同通信記者、故・橋本龍太郎元首相のいとこでも

ある橋本明氏のこのような発言が紹介されている。

「(雅子さまは結婚後)皇室外交官のようなものになつて、一緒に出かけることになるだろう。皇太子殿下は外交的役割(の約束)を雅子さまへのプロポーズの言葉に使ったが、それは大きな間違いだった。皇室はあくまで象徴であり、外交

活動の一部には組み込まれていない。あり得ないのだ。果たせない約束だった」

「宮内庁はお世継ぎを産むまで雅子さまを海外公務に出さず、不妊治療に専念させたのです(前号のインタビューより)」

そして、愛子さまご出産後も、メディア、宮内庁、皇室内部からも「今度は男児を」というプレッシャーがあり、雅子さまは「病気があり、雅子さまは病気が、なられて」というのが、著書に書かれたヒルズ氏の分析だ。ヒルズ氏は今回のインタビューでも、こう訴えている。

左から、子どもの読書活動推進フォーラムでお言葉をのべる雅子さま(03年)、外国紙での雅子さま報道(04年)、お宮参りに向かう愛子さま(02年・代表撮影)

性、そして人生における生きがいや奪われたのです。宮内庁が時代の流れを無視し、雅子さまにいくばくかの基本的自由を認めることをしないがために、彼女の人生は台無しになっている。たとえ現在行われている治療がうまくいったとしても、疾患の本当の原因が取り除かれぬ限り、再発するようになるでしょう」

著書のなかでは世界の王室と比較して日本の皇室の閉鎖性を指摘し、そうさせているのは宮内庁であると警鐘を鳴らしている。今回のインタビューでも、再度、こう語る。

「雅子さまは非常に聡明で、魅力に溢れています。日本の世界的イメージを百八十度違うものにできたかもしれないということも、まったくの悲劇としか言いようがありません。こんなことがなければ皇室の使者として素晴らしい活躍をしていたでしょう」

日本の皇室には長い歴史と伝統がある。世界の王室



1990年、友人宅に手作りのヨーグルトをもち参した雅子さま

回、再度、本誌が確認すると、著書に記載されている情報部分についてのコメントは大筋で認めながら、「自分の娘がもし（結婚して）皇室に入ったら」という前提で話した部分については「話していない」と否定した。

日本では記事に実名でコメントを載せる場合には取材相手の承諾を得る場合が多い。今回、この本が出版されたことで戸惑う証言者も少なくないかもしれない。共同通信社勤務時代、ジュネーブ、ロサンゼルスに駐在し、海外取材の経験も豊富な前出の橋本氏はこう語る。

「取材で聞いた話は、『オフレコ』という断りを入れられない限り、すべて実名証言として書くのが世界の

と比較することにとれほどの意味があるかわからないが、いずれにしても外国人の目にはそのように映るのだから。ところで、ヒルズ氏の著書の内容について、反論や異論が本誌編集部にも届いている。

例えばヒルズ氏が、雅子さまは「適応障害」ではなく「うつ病」であると断定している点について。

ヒルズ氏はその根拠の一つとして、DSM-IV（米国精神医学会の「精神疾患の診断・統計マニュアル」）では、「適応障害は一時的で、半年以上続くことはない」とされることをあげている。だが、皇室ともかわりのある医療関係者は「匿名」を条件に、今回、本誌の取材にこう話した。

「ヒルズ氏の理解は正確ではありません。マニュアルでは、適応障害はストレス因子がなくなつた後、6か月以内に解決しなければならぬと言っていますが、同時に慢性のストレス因子や永続的な結果を伴うスト

レス因子に反応して起こった場合には、6か月以上続くこともあるとされているのです。そもそも「うつ」と「適応障害」の境界が日本ではあいまいなのですから、また、愛子さまのご出産

について、ヒルズ氏は著書で「体外受精」だったと決めたが、宮内庁の関係者は、こう否定した。

「それは現実的でありえない話です。宮内庁病院には体外受精を行える設備はありません。いったい、誰がそんなことを言ったのか。噂の類を信じてしまったのではないですか」

ヒルズ氏に根拠は何かを聞いてみた。「日本の極秘情報源（医療関係者）から確認が取れている。場所は宮内庁病院ではないということですが、いずれにせよ、ヒルズ氏は、宮内庁が不妊治療に対する偏見を持っていて、実際的に見れば、そこにこだわるほうが不自然であり、赤ちゃんの誕生はどのよう

ジャーナリズムのスタンダードです」

宮内庁に事前に取材を申し込む

ヒルズ氏の著書について先週、宮内庁にコメントを求めたところ、「その本をまだ読んでいない」ということだったが、実はこの本が出版されることを、日本でいち早く知つたのは他ならぬ宮内庁だったという。ヒルズ氏の取材の通訳を務めた女性はこのように明かす。

「ヒルズ氏は本を執筆するにあたって、日本ではまず宮内庁に取材を申し込んでいます。最初に広報の方と私がメールでやりとりをしました。正式な企画書を出してほしいということだったので、（正式決定でない）本の題名と出版社、出版の時期、取材したい内容をあ

ちらの書式に従って書きました。その後、ヒルズ氏も交えて広報の方2、3人と会って企画の趣旨を話しています。どういう人を取材

実名で証言した関係者の反応は

もちろん、ヒルズ氏の記述がすべて、完璧で正確であるというわけではない。

編集者が確認しても、いくつかの細かい事実の間違いがあった。だが、前出の橋本氏はこう話す。

「間違つた情報が独り歩きするのが怖いのはもちろんのことですが、一方、（宮内庁の閉鎖的な体質で）十分な情報が得られないままの状態では、情報に間違いが生じていたとしても、無理はないと思います。ヒルズ氏の著作が、宮内庁が考えを改めるきっかけになれば歓迎すべきです」

また、橋本氏はヒルズ氏に会つたときの印象について、こう語る。「1年ほど前に会いました。アカデミックに、歴史的、制度的なことを積み上げる取材だと思う。年のいった

落ち着いた人で、取材後には手書きの手紙が届き、丁寧な人だな、と思いました」

ヒルズ氏の取材の信憑性について、本誌は著書の中で、実名でコメントしている人たちにも聞いてみた。

まず、以前、雅子さまと交流があり、ヒルズ氏の著書でも、雅子さまと一緒に写つた写真が掲載されている男性A氏は、こう認めた。「取材を受けたのは事実ですし、本に書いてあるコメントは話したとおりです」

天皇陛下の知人として登場、皇太子さまの人柄を厳しく論評もしているB氏の秘書は、二人の面会を認めましたが、B氏本人はこう語つた。「（ヒルズ氏と）会つたかどうか覚えていませんが、コメントしているようなことは言っていないです」

また、橋本氏はヒルズ氏に会つたときの印象について、こう語る。

「1年ほど前に会いました。アカデミックに、歴史的、制度的なことを積み上げる取材だと思う。年のいった

打ち出す必要があるのにそれをしない。だから、外国の人が皇室を書く場合に、不正確になったり、日本の皇室にとって不利益な面が出てくるんです。皇室のいい材料がメディアに伝わっていないのが、残念です」

一方、ヒルズ氏は、「宮内庁記者クラブでは情報を喜んで提供してくれる記者もいました」と謝意を隠さない。こうも語つた。

「雅子さまの友人の中には彼女がもっと有益な役割を果たせるように、外国人記者の書くことが多少なりとも宮内庁への圧力になればいい、と考えている人もいました」

な、あの間違つた雅子さまのお姿を再び拝見できるのか。最後に雅子さまが会見の場でお話しされたのは2002年12月、ニュージールランド、オーストラリアへ訪問前の記者会見だった。雅子さまはその席でこう話されている。

「6年間の間、外国訪問をすることがなかなか難しいという状況は、正直申し上げて私自身その状況に適応することになかなか大きな努力が要つたということがございます」

あれから長い時が流れた。本誌・中釜由起子、佐藤秀男、阿部英明

あなたの“元気”応援します

“健康で長生き”それがワクナガの願いです。

WAKUNAGA

滋養強壮・虚弱体質 熟成二ニク抽出液配合

キョーロピン

0120-39-0971

http://www.wakunaga.co.jp/

源興製薬株式会社



「着袴の儀」の予行演習時の愛子さま（上、宮内庁提供）と、11日、「本番」を終えた愛子さまを皇居へ送り出す皇太子ご夫妻（代表撮影）

「着袴の儀」

なぜか、本番映像なし

敬宮愛子さまは11月11日、一般の七五三に当たる「着袴の儀」を終えた。これにあわせ、予行演習時の動画と写真も公開。内親王としては「異例」のメディア向けサービスだが……。

濃色の小袖の上に、女官の助けを借りて同じ色の袴を着る愛子さま。その上に菊の文様をあしらった朱色の「細長」を羽織った「童形服」姿の愛子さま——。いずれも天皇、皇后両陛下

下から贈られた袴を着る「着袴の儀」を東宮御所で終えた後、報じられた画像だ。もともと、儀式の様子は「本番」ではなく7日に行われた予行演習時のもの。当日の愛子さまは皇居内にある賢所仮殿を参拝し、両陛下に「拝顔」するなど一連の儀をこなしたが、撮影の機会は東宮御所をたつ場面に限られた。

この宮内庁の報道対応を、元テレビ朝日皇室記者の神田秀一さんは「異例」と受け止めたという。「着袴の儀は元来、天皇家の男のお子様である親王の成長を願うために始まった宮中の儀式で、女のお子様である内親王の儀が大きく報じられた記憶はありません。昭和天皇の皇女のなかには行っていない方もおられるのでは。今回の扱いは大きさは、どれだけ愛子さまへの関心が高まっているかを示すものですね」

皇太子さまをはじめ、いまの天皇家の親王と内親王は慣習に従い、男女問わず5歳の誕生日を迎えるころこの儀を行ってきた。12月1日に5歳の誕生日を迎える愛子さまも例外ではない。とはいえ直近の秋篠宮眞子さま、佳子さまの場合、秋篠宮家を長く取材してきた日本テレビ系「サ・ワイド」リポーターの高清水有子さんのメモにも、詳しい記述はないという。

「眞子さまのときは黒田清子さんの着袴の儀の記録をもとに放映しましたが、眞子さま、佳子さまとも画像は拝見していません」

一方、1964年11月1日に行われた皇太子さまの着袴の儀は、カメラもペンもリアルタイムで取材が許された。朝日新聞は当日夕刊で衣装の由来を記したうえ、皇太子さまが髻盤上に乗る、東宮大夫が髪に鉢巻を入れる「深曾木の儀」を、青石を踏みつけて「エイッ」と飛び降りるまでを報じている。

「当時は東京オリンピックの直後で、皇太子さまも髻盤から飛び降りるとき体操選手の着地のポーズをまねられました。その様子が大変かわいらしかったのを覚えています。色白の愛子さまは、天皇家伝統の童形服がよくお似合いました。お父さまのような動きのあるお姿も拝見したかったですね」

と、文化女子大学客員教授の渡辺みどりさんは述べ、宮内庁東宮職は長期静養中の皇太子妃雅子さまと愛